壁塗り代換は、なぜヴォイスのカテゴリーに入らないのか

On the Reason That the Locative Alternation Is Not Viewed as a Voice Phenomenon

川　野　靖　子*

KAWANO Yasuko

１．はじめに

本稿の目的は、壁塗り代換とヴォイスの現象（主に「能動文／直接受動文」）との違いを原理的に明らかにすることである。

壁塗り代換とは、次の(1)や(2)のように、「塗る」や「満たす」等の一定の範囲の動詞が格体制の交替（～ニ～ヲ形と～ヲ～デ形の交替）を起こす現象を指す[注1]。

(1) a. 壁にペンキを塗る　　（～ニ～ヲ形）
　　b. 壁をペンキで塗る　　（～ヲ～デ形）
(2) a. グラスに水を満たす　（～ニ～ヲ形）
　　b. グラスを水で満たす　（～ヲ～デ形）

壁塗り代換には、「二つの文が同一内容を表すようにみえる」「格形式の交替が起こっている」という特徴がある。この点で壁塗り代換は、一見、次のようなヴォイスの現象と似ている。

(3) a. ネコがネズミを追いかける（能動文）
　　b. ネズミがネコに追いかけられる
　　（直接受動文）

それでは、壁塗り代換とヴォイスはどのような関係にあるのだろうか。

従来のヴォイス研究の中には、2節で取り上げる村木（1986）（1989）や早津（2005）のように、壁塗り代換をヴォイスと関連する現象とみなしている研究もある（村木 1986, 1989 は、壁塗り代換を、ヴォイスの周辺に位置する現象としており、早津 2005 は、ヴォイスではないもののヴォイスに似た性質を持つ現象であるとしている）。しかし、ヴォイスの現象と壁塗り代換の類似性は表面的なものであり、その背後にある原理において、両者は根本的に異なるのではないだろうか。本稿ではこの点を検討し、壁塗り代換はヴォイスとは無関係の現象であるという見解を提示する。

村木（1986）（1989）や早津（2005）のように壁塗り代換をヴォイスと関連する現象とする研究がある一方で、本稿のように、壁塗り代換はヴォイスとは無関係の現象であるとする考え方も珍しいものではないと思われる。しかし、そのような考え方も、「なぜ壁塗り代換はヴォイスと無関係であるといえるのか」を明らかにした上でのものではない。上でみたように、能動文と直接受動文のようなヴォイスの対立と壁塗り代換との間には、「二つの文が同一内容を表すようにみえる」「格形式の交替が起こっている」という類似点があるが（だからこそ村木 1986, 1989 や早津 2005 のように両者を関連する現象とみなす研究もあるわけであるが）、「壁塗り代換はヴォイスとは無関係の現象である」と考えた場合、これらの類似点はどのよう

* かわの・やすこ
埼玉大学大学院人文社会科学研究科准教授，日本語学

に理解するべきだろうか。また、ヴォイスの現象と壁塗り代換は、一見、「述語動詞の語形が変化するかどうか」や「交替する格形式がガ格かどうか」によって区別できるようにもみえるが、果たしてこうした形式上の相違点だけで両者の違いが捉えられるだろうか。これらの問題を明らかにした上で、ヴォイスの現象と壁塗り代換の違いを明示的に説明した研究はないのである。

本稿では、上記の類似点や形式上の相違点の背後にある、それぞれの現象の原理の違いを考察することで、なぜ壁塗り代換はヴォイスの現象と無関係であるといえるのかを明らかにする。こうした考察を行うことは、壁塗り代換という文法現象の特徴や、ヴォイスという文法カテゴリーの特徴を、それぞれより明確にすることにつながると考える。

２．先行研究、及び論点の整理

ヴォイス研究の立場から壁塗り代換に言及している研究に、村木(1986)(1989)と早津（2005）がある[注2]。本節ではこれらの先行研究の見解を確認しつつ、論点となる事柄を整理する。

村木(1986)(1989)と早津(2005)は、それぞれの立場の違いはあるものの、「能動文／直接受動文」のような典型的なヴォイスの現象と壁塗り代換との間に共通点と相違点を見出し、両者を関連する現象と捉えている点で一致する。しかし、これらの研究が挙げている共通点については、本当にそれをヴォイスの現象と壁塗り代換の共通点とみなしてよいのか疑問が残り、相違点については、ヴォイスの現象と壁塗り代換の違いを十分に捉えられないという問題があるように思われる。以下で詳しく述べたい。

村木(1986)(1989)は、「ネコがネズミをおいかけた(能動文)」「ネズミがネコにおいかけられた(直接受動文)」のような典型的なヴォイスの現象と「太郎がペンキを壁にぬった」「太郎がペンキで壁をぬった」の共通点として、次の二点を挙げている。一つは、「ネコがネズミをおいかけた」と「ネズミがネコにおいかけられた」が同じ事象を述べているのと同様に「太郎がペンキを壁にぬった」と「太郎がペンキで壁をぬった」も同じ事象を述べているという点である。もう一つは、「ネコがネズミをおいかけた」と「ネズミがネコにおいかけられた」におけるガ格名詞の交替と、「太郎がペンキを壁にぬった」と「太郎がペンキで壁をぬった」におけるヲ格名詞の交替が、どちらも「どの関与者に焦点をあてて表現するかの問題(村木 1989 : 177)」であるという点である。一方、両者の相違点としては、「太郎がペンキを壁にぬった」「太郎がペンキで壁をぬった」では「ネコがネズミをおいかけた」「ネズミがネコにおいかけられた」と異なり、動詞の形態が変わらず、交替する格形式もガ格ではないという点を挙げている。以上のような共通点と相違点を挙げた上で、村木(1986)(1989)は、「これ（引用者注：「太郎がペンキを壁にぬった」「太郎がペンキで壁をぬった」等を指す）もヴォイスの周辺に位置づけられてよい言語現象である(村木 1986 : 67)」という見解を示している。

早津(2005)は、日本語のヴォイスを、「動詞の表す動きの成立に関わるいくつかの要素のうちいずれを主語として述べるかを、動詞の語形変化によって表しわける文法カテゴリー(p.35)」と定義した上で、「壁に白いペンキを塗る」と「壁を白いペンキで塗る」について、「主語の選択に関わる問題ではなく動詞の語形の問題でもないのでヴォイスとはいえない(p.34)」ものの、「同一事態の複数の表現ではある(p.34)」という点で、「ヴォイスに似た性質をもっていると考えられる現象(p.33)」であると述べている。

以上のことを整理すると、村木(1986)(1989)や

早津(2005)では、「能動文／直接受動文」のようなヴォイスの現象と壁塗り代換との間に、次のような共通点と相違点を見出していることになる。

(4)共通点

a.同一の事態を表している。[注3]

(村木 1986, 1989、早津 2005)

b.視点の交替により格形式が交替する。

(村木 1986, 1989)

(5)相違点

a.「能動文／直接受動文」ではガ格名詞(主語)が交替するが、壁塗り代換ではヲ格名詞が交替する。

(村木 1986, 1989、早津 2005)

b.「能動文／直接受動文」では動詞の語形が変わるが、壁塗り代換では変わらない。

(村木 1986, 1989、早津 2005)

しかし、(4)は本当にヴォイスの現象と壁塗り代換の共通点といえるのだろうか。本稿では、「能動文／直接受動文」における「事態の同一性」と壁塗り代換のそれとは内実が異なること、また、両現象における格形式の交替は別の原理で起こることを示し、両者の間に(4)のような共通点は存在しないことを述べる。そして、壁塗り代換は、村木(1986)(1989)のいうような、ヴォイスの周辺に位置する現象でも、早津(2005)のいうような、ヴォイスに似た性質を持つ現象でもなく、ヴォイスとは根本的に異なる現象であるという見解を示す。

次に(5)について検討したい。(5)は「能動文／直接受動文」のような典型的なヴォイスの現象と壁塗り代換との違いとして村木(1986)(1989)と早津(2005)が挙げている特徴であり、早津(2005)では壁塗り代換をヴォイスのカテゴリーから除外する根拠となっているものである。しかし、壁塗り代換とヴォイスの現象を区別する上で、(5)は十分だろうか。具体的には次のような例が問題になると考えられる。

(6)a. グラスに水が満ちる

b. グラスが水で満ちる　　(壁塗り代換)

(7)a. ドアが閉じる

b. 太郎がドアを閉じる　　(自他同形)

(6)は自動詞の壁塗り代換であり、(7)は同形の自動詞と他動詞を述語とする文の対立であるが、どちらの場合もガ格の名詞(主語)が交替し、動詞の語形が変わらない。したがって(6)の壁塗り代換がヴォイスでないのであれば(7)もヴォイスではないことになる。しかし、(7)がヴォイスと無関係とは言い切れないのではないだろうか(早津 2005を含む多くの研究で、「ドアが壊れる」「太郎がドアを壊す」のような自他対応がヴォイスとみなされている。そうであれば(7)がヴォイスと無関係とはいえないだろう)。もちろん、(5b)の「動詞の語形」については、「自他同形の「閉じる」のようなケースはたまたまであり(あるいは個別的な理由によるものであり)、普通は「壊れる」「壊す」のように自他で語形が変わるのだから(7)もヴォイスとみなしてよい」という考え方が可能ではある。しかしその場合も、「壁塗り代換で動詞が語形変化しないのはたまたまではなく、システマティックな理由がある」ということが示されなければ、ヴォイスの現象と壁塗り代換とが区別されたことにはならないと思われる。

また、ヴォイスの現象と壁塗り代換を(5)のような形式的特徴で区別しようとすると、次のような問題も生じる。他動詞の壁塗り代換である「太郎がグラスに水を満たす」と「太郎がグラスを水で満たす」ではガ格名詞が交替しないが、自動詞の壁塗り代換である「グラスに水が満ちる」と「グラスが水で満ちる」ではガ格名詞が交替するため、

同じ壁塗り代換でも自動詞の壁塗り代換の方が他動詞の壁塗り代換よりもヴォイスの現象に近い（ヴォイス認定の条件を多く満たしている）という、奇妙な帰結を生じかねないのである。

以上のように、(5)の相違点では、壁塗り代換とヴォイスの現象の違いが十分に捉えられず、壁塗り代換がなぜヴォイスのカテゴリーに入らないのかを説明することができない。両現象の違いを捉えるには、「交替する格形式の種類」や「動詞の語形変化の有無」といった形式的な特徴だけでなく、その背後にある原理において両現象がどのように異なるのかを考察する必要があると考えられる。

以上のことを踏まえ、本稿では、以下の諸点を考察し、ヴォイスの現象と壁塗り代換とが原理的にどう異なるのかを明らかにする。

(8)①ヴォイスにおける「事態の同一性」と壁塗り代換のそれとは同じ性質のものなのか。
②ヴォイスと壁塗り代換における格形式の交替は、同じ原理で起こるのか。
③「能動文／直接受動文」のような典型的なヴォイスの対立の場合と異なり、壁塗り代換では動詞の語形が変化しないが、そこにはどのようなシステマティックな理由があるのか。

上記①～③は関連しており、①が明らかになれば②と③も自ずと明らかになると考えられる。以下の3～5節において、①～③を順に検討していく。

3．事態の同一性

ヴォイスの範囲は研究者によって異なるが、一般に能動文と直接受動文の対立が最も狭義のヴォイスと考えられている。また、村木(1986)(1989)や早津(2005)において壁塗り代換との共通性（事態の同一性）が指摘されているのは「能動文／直接受動文」である。よって以下では、「能動文／直接受動文」を壁塗り代換との具体的な比較対象として、「事態の同一性」の内実を検討していく（ただし、注6で後述するように、本稿の基本的な主張は間接受動文や使役文や自他対応にも当てはまると考えている）。

既に見たように、村木(1986)(1989)や早津(2005)では、「同一の事態を述べている」という点を、「能動文／直接受動文」と壁塗り代換の共通点としている。確かに壁塗り代換には、「事態の同一性」ともいえる特徴があると思われる。しかし「能動文／直接受動文」における「事態の同一性」と壁塗り代換のそれには、根本的な違いがあるのではないだろうか。

この点を考察する上で、文の表す意味内容を多層的に捉えた仁田(2007)の枠組みが有効であると思われるので、まずその枠組みを紹介したい。仁田(2007)は、文の表す意味を、以下の三つの層に分けている。

(9)事柄的意味の層
　叙述事態の層
　通達機能の層

「事柄的意味の層」とは、文の表す意味内容のうち、「その言語が世界のありようとして描き取った出来事や事柄を表している部分（仁田2007:6）」であり、述語の表す事態の類型（動き、状態、等）や、名詞句の意味役割（動作主、対象、等）等がここに含まれる。一方、「叙述事態の層」とは、動作主や対象といった事態参画者のうち、どの参画者を中心として事態を描き取るかという、話し手の事態に対する視点を表す部分である（「通達機能の層」については本稿の議論には直接関わらないので説明を省く）。

上で述べたように、(9)の枠組は「事態の同一性」

について考える上で有効なものである。しかし、壁塗り代換における「事態の同一性」の内実を捉えるためには、上記(9)のような、言語が表す意味内容の層だけでなく、言語による類型化を経る前の段階、すなわち、「現実世界の事態」にも目を向けることが重要になる。これを加えて整理し直すと、次のようになる。

(10)　現実世界の事態
　　事柄的意味の層
　　叙述事態の層
　　通達機能の層

それでは、上記(10)の枠組みに当てはめて考えた場合、「能動文／直接受動文」と壁塗り代換における「事態の同一性」は、それぞれどのように位置づけられるだろうか。

まず「能動文／直接受動文」の場合から確認したい。能動文と直接受動文について、仁田(2007)では、同じ事柄的意味を表しつつ叙述事態の層において異なる意味内容を表すという関係にあると論じている。また、村木(1986)(1989)も、能動文と直接受動文の対応する名詞句が同じ意味役割を担うとしていることから(「ネコがネズミをおいかけた」でも「ネズミがネコにおいかけられた」でも、ネコが動作主、ネズミが被動者の意味役割を担うとしている)、仁田(2007)でいう事柄的意味のレベルで事態(村木の用語では事象)の同一性を捉えているのだと考えられる。図で示すと(11)のようになる。

(11)能動文と直接受動文の関係
　　現実世界の事態
　　事柄的意味の層　…このレベルで同一
　　叙述事態の層　…このレベルで対立
　　通達機能の層

「能動文／直接受動文」における「事態の同一性」が事柄的意味の同一性を指しているのに対し、壁塗り代換の場合はどうだろうか。壁塗り代換の～ニ～ヲ形と～ヲ～デ形の二文も、一見、同じ事柄的意味を表すように見えるが、実際にはそうではなく、前者は位置変化を表し、後者は状態変化を表すことが、奥田(1976)や奥津(1981)等の先行研究で指摘されている[注4]。「壁にペンキを塗る」と「壁をペンキで塗る」を例にとると、前者はペンキを壁に移動させること(ペンキの位置変化)を表す文であり、一方、後者は壁の様子を変化させること(壁の状態変化)を表す文だ、ということである。この見解は以下の理由から妥当であると考えられる。～ニ～ヲという格体制をとる動詞には、「壁にペンキを付ける」「バケツに石を入れる」等があるが、これらはいずれも位置変化を表す動詞である。ここから、同じ～ニ～ヲという格体制をとる「壁にペンキを塗る」も位置変化を表すと考えられる。また、～ヲ～デという格体制をとる動詞には、「壁を泥で汚す」「塩水を水で薄める」等があるが、これらはいずれも状態変化を表す動詞である。ここから、同じ～ヲ～デという格体制をとる「壁をペンキで塗る」も、状態変化を表すと考えられるのである。

以上のように、「壁にペンキを塗る」と「壁をペンキで塗る」は別の事柄的意味を表す。しかし一方で、両文の意味はよく似ており、「事態の同一性」が感じられることも確かである。位置変化の「塗る」と状態変化の「塗る」を単なる同音異義語とするには意味が似すぎているし、英語等の他言語でも似たような動詞が同じ現象を起こすことからも(e.g., smear paint onto the wall / smear the wall with paint)、同音異義語とは考えにくい(同音異義語と考えた場合、日本語で「塗る」等が壁塗り代換を起こすことと他言語で似たような動詞が同じ現象を起こすことは偶然だ、ということ

になるが、このようには考えにくいだろう)。やはり、どこかのレベルで「壁にペンキを塗る」と「壁をペンキで塗る」の間に「事態の同一性」を考えるべきだと思われる。それでは、それはどのようなレベルにおいてなのだろうか。

このことについて考える上で、壁塗り代換に当たる「くちびるにべにをぬる」と「べにでくちびるをぬる」の関係について述べた奥田(1976)の次の記述が参考になると思われる。

> 表現される現実がひとしいということは、その連語の内部構造の同一性を意味しはしない。前者(引用者注:「くちびるにべにをぬる」を指す)がとりつけの構造であるとすれば、後者(引用者注:「べにでくちびるをぬる」を指す)はもようがえの構造である。(中略)
>
> 連語の内部構造のちがいは、現実のきりとり方のちがい、きりとってきた現実の側面の強調を意味する。おなじ現実は言語のがわからことなる風に意味づけられて、それらのうちからひとつを選択することは、はなし手にゆだねられている。 (奥田 1976:9)

上記の記述は、現実世界のある事態を位置変化(とりつけ)として類型化しているのが「くちびるにべにをぬる」であり、その同じ事態を状態変化(もようがえ)として類型化しているのが「べにでくちびるをぬる」だ、ということを述べたものだと思われる[注5]。つまり壁塗り代換は、ある現実の事態が言語において(より具体的には、仁田 2007 における事柄的意味の層において)二通りに類型化される現象なのであり、壁塗り代換でいう「事態の同一性」とは「二つの文が指示している現実世界の事態が同一であること」を指していると考えられる。「壁にペンキを塗る」と「壁をペンキで塗る」を例にとると、現実世界のある事態を「壁の形状に沿ってペンキが存在するようになる」という位置変化の事態として類型化したのが前者の文であり、「壁がペンキを伴った状態になる」という状態変化の事態として類型化したのが後者の文だ、ということである(このようなタイプの位置変化と状態変化を、川野 2009 ではそれぞれ「依存的転位」、「総体変化」と呼んでいる)。図で示すと、次の(12)のようになる。

(12)「壁にペンキを塗る」と「壁をペンキで塗る」の関係

現実世界の事態 …このレベルで同一
事柄的意味の層 …このレベルで対立
叙述事態の層
通達機能の層

以上のように注意深く検討してみると、「能動文/直接受動文」と壁塗り代換では、「事態の同一性」の内実が異なっていることがわかる。能動文と直接受動文は同じ事柄的意味を表しつつ叙述事態の層において対立するという関係にあり、この場合の「事態の同一性」は(現実世界の事態が同じというだけでなく)「事柄的意味としての事態が同一」であることを指す。これに対し、壁塗り代換は現実の事態が事柄的意味の層において類型化される際に起こる現象であり、この場合の「事態の同一性」は「現実世界の事態が同一」であることを指していると考えられる[注6]。

4. 格形式の交替

冒頭で述べたように、「能動文/直接受動文」等のヴォイスの現象でも壁塗り代換でも格形式の交替が起こる。しかし、前節の議論を踏まえると、格形式の交替が起こる原理はそれぞれ異なると考

えられる。すなわち、「能動文／直接受動文」の場合は、叙述事態の層における意味内容の交替によって格形式の交替が起こり、壁塗り代換の場合は、事柄的意味の層における意味内容の交替によって格形式の交替が起こると考えられるのである。本節ではこのことを詳しくみていく。

まず「能動文／直接受動文」の場合から確認したい。村木(1986)(1989)を含む多くの研究で論じられているように、「能動文／直接受動文」では話し手がどの参画者に視点を置いて述べるかによって(つまり叙述事態の層における意味内容の異なりによって)ガ格の名詞が交替する。

ここで重要な点は、「能動文／直接受動文」におけるガ格名詞の交替は意味役割の交替によって(すなわち、事柄的意味の違いによって)起こるのではない、という点である。村木(1986)(1989)や仁田(2007)も述べているように、「ネコがネズミをおいかける」の「ネコ」も、「ネズミがネコにおいかけられる」の「ネコ」も、〈動作主〉であり、意味役割は同じである。このことから、「ネコ」の格形式が交替する理由は、「ネコ」の意味役割にあるのではなく、話し手が「ネコ」に視点を置いて述べているかどうかにあると考えることができる。

これに対し壁塗り代換の場合はどうだろうか。3節の議論を踏まえると、壁塗り代換における格形式の交替は、事柄的意味の層における事態類型の交替と、それに伴う事態参画者の意味役割の交替によって起こると考えられる。既にみたように、壁塗り代換は、ある現実世界の事態が事柄的意味の層において「位置変化」と「状態変化」の二通りに類型化される現象である。位置変化として類型化される場合には、事態参画者は〈(位置変化の)対象〉や〈着点〉の意味役割を担うことになり、現代日本語における一般的な意味役割と格形式の対応関係にしたがって、〈(位置変化の)対象〉はヲ格、〈着点〉はニ格で表示されることになる。これが「壁にペンキを塗る」の場合である。

(13)　壁に　ペンキを　塗る
　　〈着点〉　〈対象〉　位置変化

一方、同じ現実の事態が状態変化として類型化される場合には、事態参画者は〈(状態変化の)対象〉や〈材料〉の意味役割を担うことになり、〈(状態変化の)対象〉はヲ格、〈材料〉はデ格で表示される。これが「壁をペンキで塗る」の場合である。

(14)　壁を　ペンキで　塗る
　　〈対象〉　〈材料〉　状態変化

以上の結果として、(13)と(14)の二文間に「ペンキを↔ペンキで」「壁に↔壁を」という格形式の交替が生じることになるのである。

なお、「太郎がペンキを壁にぬった」と「太郎がペンキで壁をぬった」を、能動文と直接受動文の関係と同じように、同一の事態を異なる視点から表現した二文とみる村木(1986)(1989)は、「主格をのぞけば、一般に対格はそれ以外の格よりも焦点がおかれる傾向がある(村木 1989:177)」とした上で、「太郎がペンキを壁にぬった」と「太郎がペンキで壁をぬった」の対立も「能動文／直接受動文」などと同様、「どの関与者に焦点をあてて表現するかの問題である(同 : 177)」と述べている。たしかに「壁にペンキを塗る」はペンキに、「壁をペンキで塗る」は壁に注目した表現であるともいえるだろう。しかし、ここでいう「注目」の内実を考えてみると、それは「どの事物を〈対象〉とみなすのか」という意味での「注目」であり、ヴォイスにおける視点(焦点)の交替とは別のものだと考えられる(ヴォイスにおける視点(焦点)の交替は、「どの事物を〈動作主〉とみなすのか」と

いったものではない)。

壁塗り代換における格形式の交替が、叙述事態の層における視点の交替ではなく、事柄的意味の層における意味役割の交替によって起こることを示す現象として、川野(1997)(2004)(2006)(2009)で指摘した「餅くるみ交替」を挙げておきたい。

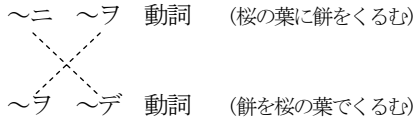
餅くるみ交替:

(15)a.桜の葉に餅をくるむ　(〜ニ〜ヲ形)
　　b.餅を桜の葉でくるむ　(〜ヲ〜デ形)
(16)a.風呂敷に本を包む　(〜ニ〜ヲ形)
　　b.本を風呂敷で包む　(〜ヲ〜デ形)

餅くるみ交替は、〜ニ〜ヲ形と〜ヲ〜デ形の交替現象であるという点で壁塗り代換と共通し、また、同じ現実の事態が位置変化と状態変化の二通りに類型化されることで起こる現象であるという点でも壁塗り代換と共通する(川野 2006, 2009)。ただし下記に整理して示すように、交替のパターンが壁塗り代換とは異なる。

(17)壁塗り代換

(18)餅くるみ交替

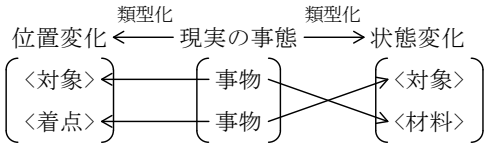


つまり、〜ニ〜ヲ形と〜ヲ〜デ形の交替は、常に壁塗り代換のようなパターンで起こるとは限らず、餅くるみ交替のように、ヲ格の名詞はそのままで(「餅を」)、ニ格とデ格が交替する(「桜の葉に⟷桜の葉で」)というパターンもある、ということである[注7]。

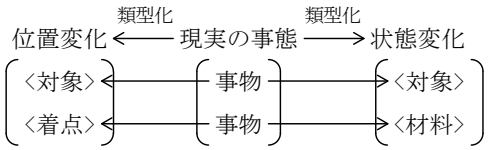
ここで仮に、〜ニ〜ヲ形と〜ヲ〜デ形の交替が、「能動文/直接受動文」のように叙述事態の層における視点の交替によって起こるのだと考えたとすると、餅くるみ交替の存在が説明できないことになる。(18)が示すように、餅くるみ交替では〜ニ〜ヲ形でも〜ヲ〜デ形でもヲ格で表示される名詞は同じであり(「餅」)、視点の交替は起こっていないからである。

これに対し、「〜ニ〜ヲ形と〜ヲ〜デ形の交替は、事柄的意味の層における事態類型や意味役割の交替によって起こる」と考える本稿の見解では、壁塗り代換と餅くるみ交替の両方の存在が、次のようにして説明できる。ある現実の事態が位置変化として類型化される場合、その事態に含まれる二つの事物のうち、いずれかが〈(位置変化の)対象〉になり、残りが〈着点〉になる[注8]。また、同じ現実の事態が状態変化として類型化される場合は、二つの事物のうちのいずれかが〈(状態変化の)対象〉になり、残りが〈材料〉になる。つまり、二つの事物と、それらが位置変化事態や状態変化事態において担う意味役割との対応関係には、次の二つのパターンがあり得ることになる。

パターン①



パターン②



このうち、パターン①の類型化を経て実現されるのが壁塗り代換であり、パターン②の類型化を経て実現されるのが餅くるみ交替である[注9]。

以上、本節では、壁塗り代換における格形式の交替が、叙述事態の層における視点の交替によって格形式が交替するヴォイスの現象とは異なり、事柄的意味の層における意味役割の交替によって起こることを述べた。またその証左として餅くるみ交替の存在を指摘した。

5．動詞の語形

「能動文／直接受動文」等のヴォイスの現象と異なり、壁塗り代換では述語動詞の語形が変化しない。3節の議論を踏まえると、壁塗り代換において動詞の語形変化が起こらないのはたまたまではなく、次のようなシステマティックな理由があると考えられる。

3節では、壁塗り代換が、事柄的意味の層における類型化の段階で起こる現象であると論じた。壁塗り代換の場合、同じ現実の事態が二通りに類型化されるという点が特殊なのであるが、事態の類型化自体はどの動詞にもみられる過程である。たとえば「付ける」「入れる」「置く」等の動詞(いずれも壁塗り代換を起こす動詞ではない)は、「着点ニ対象ヲ」という格体制をとるが、このことは、これらの動詞が、それぞれの指示する現実の事態を、同じ「位置変化」として類型化していることを示している。そしてここで注目したい点は、そうした事柄的意味が動詞の語形によって表示されるわけではない、という点である。「付ける」「入れる」「置く」等の動詞が位置変化を表すことが、動詞の語形によって(たとえば何らかの接辞の付加等によって)示されるわけではないのである。このことはどの事態類型についても言えることであり、「状態変化」の場合もそうである(たとえば「汚す」は状態変化を表すが、そのことが語形で示されるわけではない)。

このことを踏まえると、壁塗り代換において～ニ～ヲ形の述語と～ヲ～デ形の述語が同じ語形で(「塗る」なら「塗る」という語形で)現れる理由も、壁塗り代換が事柄的意味の層における類型化の過程で生じる現象であるということから説明できる。「付ける」等と同じように、「塗る」も、それが指示する現実の事態を位置変化として類型化する。そして、「付ける」が、位置変化動詞であることを示す特別な語形をとることなく～ニ～ヲ形の文を形成するのと同じように(e.g., 壁にペンキを付ける)、「塗る」も「塗る」という語形で位置変化動詞として～ニ～ヲ形の文を形成するのである(e.g., 壁にペンキを塗る)。また、「塗る」が指示する現実の事態は、状態変化としても類型化される。そして、「汚す」が、状態変化動詞であることを示す特別な語形をとることなく「汚す」という語形で～ヲ～デ形の文を形成するのと同じように(e.g., 壁を泥で汚す)、「塗る」も「塗る」という語形で状態変化動詞として～ヲ～デ形の文を形成するのである(e.g.,壁をペンキで塗る)。以上の結果として、～ニ～ヲ形でも～ヲ～デ形でも「塗る」は「塗る」という語形で現れることになる。

先にみたように、村木(1986)(1989)では、「太郎がペンキを壁にぬった」と「太郎がペンキで壁をぬった」を、能動文と直接受動文の関係と同じように、同一事態を異なる視点から述べた二文として位置づけている。しかし、このように考えた場合、なぜ「能動文／直接受動文」の場合と異なり壁塗り代換では動詞が語形変化しないのかが問題になるだろう。これに対し、壁塗り代換を、同じ現実の事態が事柄的意味の層において二通りに類型化される現象と位置づける本稿の立場では、壁塗り代換における動詞の語形の特徴を、「「位置変化」や「状態変化」といった事態の類型が動詞の語形によって示されることはない」という日

本語の一般的なシステムの中で捉えることができるのである[注10]。

６．自他同形と壁塗り代換はどのように区別されるか

最後に、これまでの考察によって「閉じる」のような自他同形の文と自動詞の壁塗り代換との違いがどのように説明されるかをみる。

(19) 自他同形
　a.ドアが閉じる
　b.太郎がドアを閉じる　　(＝(7))
(20) 壁塗り代換
　a.グラスに水が満ちる
　b.グラスが水で満ちる　　(＝(6))

(19)は、(19b)の表す事態に(19a)の表す事態が包含されるという関係にあるが、それぞれの文が表す事柄的意味としての事態が包含関係にあるのであり、「能動文／直接受動文」における「事態の同一性」が事柄的意味のレベルのものであることと共通する((19a)も(19b)も対象(ドア)の状態変化を表す)。これに対し(20)は、これまでみてきた他動詞の壁塗り代換と同様、同じ現実の事態が事柄的意味の層において二通りに類型化される現象であり、(20a)は位置変化、(20b)は状態変化という別の事柄的意味を表す。つまり(19)と(20)は、「同一の事態を表す(あるいは表される事態が包含関係にある)」といった場合の「事態」のレベルが異なるのである。

また、(19)におけるガ格名詞の交替と(20)におけるガ格名詞の交替には、次のような原理的な違いがある。(19)では事態参画者の意味役割が替わらず((19a)の「ドア」も(19b)のドアも〈対象〉である)、視点の移動によってガ格の名詞が交替する。これに対し、(20)では、事態参画者の意味役割が以下のように交替することでガ格の名詞が交替すると考えられる。

(21) a. グラスに　水が　　満ちる
　　〈着点〉　〈対象〉　位置変化
　b. グラスが　水で　　満ちる
　　〈対象〉　〈材料〉　状態変化

(21)における格形式の交替原理は、「壁にペンキを塗る」「壁をペンキで塗る」のような他動詞の壁塗り代換における格形式の交替原理と同じである。このように、「交替する名詞がガ格名詞かどうか」という形式的特徴ではなく、それぞれの現象において格形式が交替する原理を考えることで、「他動詞の壁塗り代換より自動詞の壁塗り代換の方がヴォイスの現象に近い」といった奇妙な帰結を生じることなく、ヴォイスの現象と壁塗り代換とを区別することができる。

さらに、述語動詞の語形に関しても、(19)と(20)には次のような違いがある。壁塗り代換の(20)では、「日本語において、位置変化や状態変化といった事態の類型が動詞の語形によって表示されることはない」というシステマティックな理由により、(20a)の「満ちる」と(20b)の「満ちる」が必然的に同形になっていると考えられる。これに対し、自他対応の(19)では、「(19a)の自動詞「閉じる」と(19b)の他動詞「閉じる」が同形なのはたまたまだ」と考える余地がある。仮に何らかの理由があるとしても、(19)が壁塗り代換のような事態類型の交替ではない以上、同形になる理由は壁塗り代換の場合とは異なると考えられる。

以上のように、「事態の同一性」の「事態」の内実を考え、「格形式の交替」や「動詞の語形」といった形式的特徴の背後にある原理を考察することにより、ヴォイスの現象と壁塗り代換の違いを捉えることが可能になる。

7. まとめ

本稿では、「能動文／直接受動文」等のヴォイスの現象と壁塗り代換との間に、以下のような原理的な違いがあることを明らかにした。

①事態の同一性：能動文と直接受動文は、同じ事柄的意味を表しつつ叙述事態の層において異なる意味内容を表すという関係にあり、この場合の「事態の同一性」は「事柄的意味としての事態が同一」であることを指している。これに対し壁塗り代換は、同じ現実の事態が二通りの事柄的意味に類型化される現象であり、この場合の「事態の同一性」は「現実の事態が同一」であることを指している。

②格形式の交替：「能動文／直接受動文」では、話し手がどの事態参画者に視点を置いて述べるかによって、格形式が交替する（すなわち、叙述事態の層における意味内容の交替によって格形式の交替が起こる）。これに対し壁塗り代換では、事態類型の交替（位置変化か状態変化か）と、それに伴う事態参画者の意味役割の交替によって格形式が交替する（すなわち、事柄的意味の層における意味内容の交替によって格形式の交替が起こる）。なお、餅くるみ交替の存在は、このことの証左になる。

③述語動詞の語形：「能動文／直接受動文」の場合と異なり、壁塗り代換では動詞が語形変化しない。このことは、「壁塗り代換は同じ現実の事態が二通りの事柄的意味に類型化される現象である」という上記①の議論と、「「位置変化」や「状態変化」といった事態の類型が動詞の語形によって表示されることはない」という日本語の一般的なシステムから捉えられる。

以上から、壁塗り代換はヴォイスとは根本的に異なる現象であると考える。

従来の研究のように、交替する格形式の種類や動詞の語形といった形式的な特徴を記述するだけでは、ヴォイスの現象と壁塗り代換の違いを捉えることに限界がある。本稿では、一見ヴォイスの現象と壁塗り代換の共通点のようにもみえる「事態の同一性」の内実の異なりを明らかにし（上記①）、「格形式の交替」や「動詞の語形」といった形式的な特徴の背後にある原理において両現象がどう異なるのかを明らかにすることによって（上記②③）、壁塗り代換がヴォイスとは無関係の現象であることを示し、なぜ壁塗り代換はヴォイスのカテゴリーに入らないのかを説明した。

注

注1　本稿では他動詞の例で議論を進めるが、本稿の議論は自動詞の壁塗り代換（「グラスに水が満ちる／グラスが水で満ちる」のような、～ニ～ガ形と～ガ～デ形の交替）にもそのまま当てはまるものである。

注2　村木（1986）（1989）と早津（2005）は「壁塗り代換」という用語を用いているわけではない。しかし取り上げている例文が壁塗り代換の代表的な例文であるため、事実上、壁塗り代換について議論していると判断した。

注3　村木（1986）（1989）では「事象」、早津（2005）では「事態」という用語が用いられているが、以下本稿では、「事態」に統一して用いる。

注4　研究者によって用語は異なり、奥田（1976）では「とりつけ」と「もようがえ」、奥津（1981）では「移動」と「変化」という用語が用いられている。近年の研究では「位置変化」と「状態変化」が一般的であるので、本稿では引用等を除き、これを用いる。

注5　井島（2005:68）も、「人間が外界の現象を認知するには、限られた数の認知の枠組というものが前もって用意されており、それを現象に当てはめて現象を類型化することによってどのような種類の現象であるかを理解するものと考えられる」とした上で、壁塗り代換は「〈変化〉

の枠組も〈移動〉の枠組もどちらも当てはめ可能な中間的な現象」であると述べている。

また、壁塗り代換に相当する英語のlocative alternation (e.g., load hay onto the wagon / load the wagon with hay)について述べた、Pinker (1989:79)の次の記述も、同様の見解を述べたものだと思われる。

> Basically, it is a gestalt shift: one can interpret loading as moving a theme (e.g., hay) to a location (e.g., a wagon), but one can also interpret the same act in terms of changing the state of a theme (the wagon), in this case from empty to full, by means of moving something (the hay) into it.

ただし、全ての位置変化動詞が壁塗り代換を起こすわけではなく(壁にペンキを付ける／*壁をペンキで付ける)、全ての状態変化動詞が壁塗り代換を起こすわけでもない(*壁にペンキを汚す／壁をペンキで汚す)。したがって、より厳密に述べれば、壁塗り代換は、同じ現実の事態が言語において位置変化のある下位類と状態変化のある下位類の二通りに類型化される現象であるといえる。このことの詳細は川野(2009)を参照されたい。

注6 ヴォイスのうち、「子供が泣く／花子が子供に泣かれる(間接受動文)」「花子が郵便局に行く／母親が花子を郵便局に行かせる(使役文)」「ドアが壊れる／太郎がドアを壊す(自他対応)」等の場合は、二つの文が同一事態を表すのではなく、一方の文の表す事態が他方の文の表す事態に含まれるという関係にある。しかしこの場合も、それぞれの文が表す事柄的意味としての事態が包含関係にあるのであり、「能動文／直接受動文」の「事態の同一性」が事柄的意味のレベルのものであることと共通する。

注7 餅くるみ交替ではヲ格名詞の交替は起こらないが、厳密には意味役割のレベルでの交替が起こっている。具体的には、「桜の葉に餅をくるむ」の「餅」が位置変化対象であるのに対し、「餅を桜の葉でくるむ」の「餅」は状態変化対象である(川野2006)。

注8 厳密には、事態にはもう一つ、〈動作主〉として類型化される事物(他動詞文のガ格名詞句)が含まれるが、〈動作主〉は壁塗り代換や餅くるみ交替における格形式の交替には関わらないため、ここでは説明から省いている。

注9 なぜ「塗る」では壁塗り代換のパターンになり、「くるむ」では餅くるみ交替のパターンになるのかという問題については、川野(2006, 2009)を参照のこと。

注10 二通りの類型化がなされる「塗る」等の動詞(すなわち、壁塗り代換や餅くるみ交替を起こす動詞)と、位置変化あるいは状態変化の一方としてしか類型化されない「付ける」「汚す」等の動詞(すなわち、壁塗り代換や餅くるみ交替を起こさない動詞)では何が異なるのか、という問題については、川野(2009)を参照のこと。

引用文献

井島正博(2005)「変化動詞文の格構造」『日本語学論集』創刊号, 東京大学大学院人文社会系研究科国語研究室

奥田靖雄(1976)「言語の単位としての連語」教育科学研究会・国語部会 (編) 『教育国語』45, 麥書房

奥津敬一郎(1981)「移動変化動詞文―いわゆる spray paint hypallage について―」『国語学』127, 国語学会

川野靖子(1997)「位置変化動詞と状態変化動詞の接点ーいわゆる「壁塗り代換」を中心にー」『筑波日本語研究』2

川野靖子(2004)「「桜の葉に餅をくるむ」と「餅を桜の葉でくるむ」ー壁塗り代換との関連性ー」『香椎潟』50, 福岡女子大学国文学会

川野靖子(2006)「現代日本語における位置変化構文と状態変化構文の交替現象ー格成分の対応の仕方ー」『日本語の研究』2-1, 日本語学会

川野靖子(2009)「壁塗り代換を起こす動詞と起こさない動詞ー交替の可否を決定する意味階層の存在ー」『日本語の研究』5-4, 日本語学会

仁田義雄(2007)「日本語の主語をめぐって」『国語と国文学』84-6, 東京大学国語国文学会

早津恵美子(2005)「現代日本語の「ヴォイス」をどのように捉えるか」『日本語文法』5-2, 日本語文法学会

村木新次郎(1986)「ヴォイスの輪郭」『国文学解釈と鑑賞』51-1, 至文堂

村木新次郎(1989)「ヴォイス」北原保雄(編)『講座日本語と日本語教育 4　日本語の文法・文体(上)』明治書院

Pinker, Steven (1989) *Learnability and Cognition: The Acquisition of Argument Structure*, MIT Press, Cambridge.

付記　本稿を成すにあたり、小柳智一氏よりご指導を賜りました。また、第 11 回現代日本語文法研究会(2014 年 12 月 6 日、於大東文化会館)での研究発表において、参加者の皆様より多くのご指摘やご助言をいただきました。記して感謝申し上げます。

なお、本稿は、科学研究費補助金(基盤 C, 課題番号 26370527)による研究成果の一部です。